

ニルンスト・ペルンハイム著

講座

史學研究法（三七）

小林秀雄 譯

目次摘要

第一篇 緒論	一
第二篇 方法論	一一九
第三篇 史料篇	一八一
第四篇 考證篇	二八四
第一章 眞偽の鑑定	二九二
第二章 史料の外的決定	三七一
第三章 校正及び出版	四三一
第四章 史料の内的決定	四八三
第五章 史料相互の鑑査	五三九
第六章 事實の總判定	五五五
第七章 考證された材料の整理	五六一
第五篇 史論篇	五七四
第一章 解釋	五七八
一 遺物の解釋	五八〇
二 記錄の解釋	五八八

2 記録の解釋

記録史料の解釋については、人間思想の徹底的表現である言語及び文字からして、ある事實に關する作者の觀察・觀念・思考を認識し、また理解することが取扱はれる。

かゝる問題の取扱にとつて最重要なことは、詞及び文字により或人が他人を理解するには、聞いた語音或は見た文字記號が談話者或は記述者の精神に生じた同一な觀念及び思考を讀者或は讀者の精神に刺戟し得るといふことを總め明瞭ならしめることであり、而して之は人間性の一般の一致によつてのみ可能である。之は同時代人及び同民族仲間との理解のみならず、總ての人間の相互の理解にも適合すること、吾人が既に「確實なる歴史知識の主觀的可能性」及「自然科学と史學との關係」の節に述べた如く、感情・思考及び慾望に於ける人間性の一般の一致は總ての歴史認識の心理學的大法である。個々の場合の應用に當つては、普通この意味で共通性 (communism) といふ詞を用ふる。

吾人は既に個人の場合にせよ、全民族及び全時代の場合にせよ、感情及び思考の個性的表現の相違は理解の可能を妨ぐるものでないことを説明した。然しかゝる相違は解釋の必要が存する所以である。實にかゝる相違によつて詞や文字はいつも此等によつて表示される觀念及び思考の適當な代表者ではなく、只便宜上の記號であることを示すが故に、此等が表示する觀念等を認識する爲には、此等の時々々の意義を知らねばならない。言を換へていへば、吾人が學ばねばならない種々な言語及び文字の種類があり、また同じ言語集團の中にも種々なる表現法があり、それがまた作者の個性により、史料の種類により、また史料の成立時代及び場處によつて相違があるのである。かゝる所からして直接に解釋の問題が生じてくるのであつて、上記の要件を顧みて、民族・時代・個人圈及び個人の種々な表現法から、それらが表現せんとするものを認識することを稱して、これらを理解するといふのである。

(a) 文字及び史料の外的現象の解釋 文字の解釋は殆んど獨立な補助學科たる書學の問題となつてゐるが、之については既に説明した所であり、こゝには更に何等注意する必要はない。こゝにはまた感情記號・訂正記號・削除及び數衍記號の解釋をも考へられるのである。

之に反して史料に於ける或外的現象に關する二三の注意が必要である。その解釋は書學の範圍に入らず、全く解釋の範圍に入るべきもので、假令は或史料に於いて個々のもの、或はある部分が削除され、或は特別な記號が用ひられてゐる如き、之である。かゝる削除線及び記號が何を意味するかを明白にすることは非常に重要であり得る。草稿とか計算書などでは全文書の削除線は、屢々その場合が完了したとか、負債が支拂れたとかいふことを意味する。王の衛兵に徵發された騎士の名簿などでは、個々の姓名の削除線はその者が拒絶したことを意味する。ループレヒト王の秘書帳簿の記號はそれぞれ多數の文書と或る公使館等のそれぞれの書類との關係を意味してゐる。かゝる事情は傳來の習慣及びその個々の關係の觀察によつて明白にされ得る。その形式の關係してゐる文書及び書類の外的現象は特に古文書學の説明する所であつて、之については既に説明した如くである。

(b) 言語の解釋 吾人は既に歴史の補助學科としての言語學を論じた所に、歴史家の立派な言語學的訓練は史料の言語的理解を開發するが故に、歴史家に收つて之が如何に必要であるかを述べた。言語學者は言語的解釋を方法的に完成して居り、而して殊に解釋の章の注に擧げた方法學的作物に於いて、吾人が一般的に之を指示すれば十分なほど詳細に取扱はれてゐる。然し特にこゝに此等歴史家に關係する範圍の最も重要な論點を擧げねばならない。之は此等のものが事實の正當な解釋についての標準を與ふるが故である。

また歴史家に取つては、その時々々の史料の言語の單に表面的な、文法的知識のみでは、その史料及びその個々の表

現を實際正當に十分に理解することは出来ないであつて、是非其の文學の發展、及び殊に發展階段を十分に明つてゐなければならぬ。假令ば中古史料を取扱ふ場合、一般にフテン語を熟知してゐるだけでは十分でない。實際それだけでは、假令ばメロピス家文書に、コデックス・カロリヌスの法王文書に、グレゴール・フォン・ツールの作物に、また其他のものに現れるラテン文典及び構成法の著しい相違をば、紀元十八世紀にもなほ行はれた如くに、或は傳承の破毀として、或は作家の個人的無教育の徴證として考へることをさせて、實際益々増大する文典的及び構成法的形式の分裂に現れ、然もそのものにあつては正則な言語的發展の現象を取扱つてゐるのであるといふことを考へなければならぬ。

而して解釋は更に深く侵入せねばならない。吾人は事實を常に正當に把握する爲には、吾人が取扱ふべき史料圖、實に個々の史料の語法を深く知らねばならない。古代史の範圍では古典言語學の非常な發展にも拘らず、之が無数の補助法、一般字典及び特別字典によつて實に容易にされる。他の範圍、ことに中古ラテン語の範圍の如き、なほかかる補助法を欠く場合、吾人は自ら語法の特有な觀察に依つて十分誤解を避けねばならない。特に吾人の注意せねばならないのは詞の意義及び用法の變化である。之は同じ言語及び文學の内に大なる後日を奏する許りでなく、殊に類似の言語の相互の移換に際しても同様で、之は中古ラテン語及びローマンス語の構成に際して見られる所である。この際とかく語法の變化が誤解され易いのである。

ある著名な例に非常な功績のあるモット・モツ・フカ・ゴーリングル(J. von Döllinger)の過失で、彼の秀れた作物に中古の法王説書 *Die Pfaffenbuln des Mittelalters 2. Aufl.* 第八二頁に、かの有名なロンスタンチン贈與狀の注文である *omnes latine seu nos italicum regionum provincie* 引渡をば皇帝側から法王へと取扱つて「總てのイタリヤの州或は此等西方領」と記し、之に依つて帝權接受の爭議の時代に、聖書文句の無害的反覆に際して *nos* の代りに *latini* が置かれたといふ注意をまで與へて居り、可してこゝにかの後の時代の非常に重要なものとなつた領土要求を明白に報告してゐるものと見てゐる。かゝる解釋及びその結果は間違ひで、之はゴーリングルが言はれたる詞が當時既に今は昔の結合的意義を失つて居つて、またこのコンスタンチンの贈與狀の源である史料範圍に於ては正しく述結的分詞と全然區別なく使用されてゐることを注意しなかつたからである。—— *milie minus* が *quoque* の意義に類する誤解、*ut quia quod quatenus* を相互の義とする區別なき使用の如き、同様の過失は屢々行はれ、また轉されてゐるが、之は既に述べた如く、中古ラテン語の範圍ではゾー・カンデ *De Gange* によつて告げられる如き沙語字彙があつても普通語法の特有な字典がつかうである。私はこの必要な補充については補助學科の言語學の項に述べた。

吾人は或史料を解釋する爲には正しく、いちどるしくかゝる範圍を用心せねばならないが、假令それがこの目的の爲に單に一篇であつても、少くとも注意深い論議によつて、その史料に一番近い文典範圍を出来るだけ承知してゐなくてはならない。詞の意義の術語への特殊化、或は擴大(一般化)も詞の意義變更であるから、かゝる術語の認識及び觀察は少からず重要である。殊に之が法律史及び制度史の範圍に於て注意を要する。中古史料に於て封建制度に於けるかゝる術語を誤解して、吾人が *milis* を「兵士」と、*homines* を「人間」と、ある關係に於て *beneficium* 「知行」を「善行」と譯さんとするならば、全く事實の意義を曖昧ならしむるものである。非常に不器用な過失は初學者にも見付られる所であるが、術語的表現の誤解は屢々非常に複雑した關係を有し、深遠な注意、實に厄介な研究によつて、初めてその存在及び意義を發見するが如きことは屢々見られる所である。

假令ばラムベルク・フオン・ハルスフニルに於ける *enclavatum* なる詞は「意地悪な訴訟」を意味するといふ證明がゲー・ワイツの記念歴史論文、紀元一八八六年、第二二〇頁にはヘー・サルマンになつて、また *beneficiarius* なる詞は紀元四一六世紀には戦士といふ術語であるといふ説明が古代ドイツ史學會所報、第八卷、第三五頁のペー・ニワルド・P. Isenhardt によつて、また省約的に書かれた詞に關して種々な憶説を生ぜしめた *eterni sunt quetti* なる詞の用法の説明は新報、卷七、第四〇四頁にツェー・ウイエル *U. Will* に *capit. dividere* 及び *divisio* なる詞の解釋にウエー・リッペンツクの論文カロー・マルテル及び其王子時代のフレン

Shimony, Berlin, 1883) に、又紀元八世紀の史料に於ける *respublica Romanum* の意義に關する説明は教會法雜誌、紀元一八八二年卷一七、第一七二頁のエル・ワイランド E. Weiland F. v. Op. オーストリア歴史研究所の報告、紀元一八八四年、卷五、第二〇二頁のフリー・シニツフェルボイホルスト F. Schaeffer-Zyffert の論文、並に前篇の偽作の條の「カトリック家の法本への附與狀」に導けた編文に述べられてゐる *minime* 及び *Roant* に關してはドイツ議會書類、卷二、第七七頁に、市境界についてはゲー・ロイツ記念歴史論文、紀元一八八八年のニル・シリ・デル・シュネーの論文及び同人のドイツ法律史教本 *Lehrbuch der deutschen Rechtsgeschichte* 5 Aufl. 1907 第六四七頁を見よ。人體學の學術的な例を供するものは、ニリウス・フイッケルの作、帝國諸民階級に關する Julius Ficker, Vom Reichsfürstentum に於ける紀元十二世紀の *principes* なる詞の意義及びその意義變化の燭照を確立である。更に法王選舉の際に現れる種々なる術語に關してリハー・ド・サツペルの著「法王選舉」Richard Zöpfer, Die Papstwahlに於ける研究、また殊にこの際重要な役割を演ずカルデナルの交渉及び *religiosi clerici* なる詞の意義については歴史年鑑、紀元一八八〇年、卷一、第五一六頁、紀元一八九八年、卷一九、第八二七頁、紀元一八九九年、卷二〇、第二四八頁にあるマリー・グラウニルト A. Grunert の研究を見よ。

個々の史料文句の解釋のみならず、全關係及び經過の解釋も屢々かゝる表現の認識による。法律史及び憲法史の上では之に屬する表現が十分に規定され、また互に制限されるに至り、その認識が非常に好都合になつたが、人間の非常に内的な精神生活の範圍に於ける、語言及び之と關係してゐる觀念の變化を明にすることは、なほ非常に困難である。之は全觀察及び文化の自然の變化と關係を有し、また之によつて事實の理解の上に大なる意義を有するによる。實にかゝる表現の特有な、眞實の意義に入込むことが努力されて以來、新舊聖書は非常に深く、また非常に眞實に理解されるに至つた。紀元十二世紀の律僧が信仰に *faith* と關聯して理性 *ratio* について談る場合、紀元十八世紀の啓蒙派の人が同じ詞を用ふる場合とは全く違ふ。概して宗教觀念及び科學の無數の觀念は同様な表現の被蔽の下に非常な變化がある。之に關してエドウィン・ハッチは機智的に、且つ適確に「時代といふ餘々たる、また默々たる

鍔金術によつて制度は變化するが、然し之を現す詞は屢々永遠に残存する。故に吾人は多少無意識に同じ詞が今現すものを過去に於ても現したものと假定する傾向がある。故に吾人は過去の記録に於て際會する總ての名稱について實際に爲さねばならないことは、吾人自身の時代に殘つてゐる事柄から全然獨立して之を取扱ふことである云々といふてゐる。この點に於いて非常に詞の反年代的な解釋をしない様に注意せねばならない。之は只に術語的な意義、またその他の特有な意義を誤解せしむるのみならず、その詞に遅かれ、早かれ、その時代になかつた意義を間違つて負はせることとなる。かくて封建制度の完成以前に *beneficium* なる詞を術語的意義で *lehen* と譯せんと思ふ場合、兵制及び制度に關する中古作家の無數の純ローマ的表現 *color*, *neffia*, *semitus* *ae* *populus*, *patrias*, *provincia* 等をその根本の意義で理解せんと欲する場合は、之である。ある概計を一定の數の報告としてでなく、數量の一般記述として用ふる如き、かかる時々の表現習慣の觀察もこゝに屬するものである。

同時に言語の純粋な、言語的理解に際して、屢々その史料國の文學狀態、實に全體の文化狀態を熟知し置くことが必要であるが、之は總て構成された言語の中に存してゐる表現の立派な眞髓及び潜在的關係を理解する爲に、更に高い程度に於て必要である。吾人は單に如何に吾人の今日の語法が吾人の古典家の表現、説話、諺言及引用句として現されずして、而して實に總て教育ある聽者及び讀者が認めてゐる一般の語方の名残を存し、従つて吾人がシルレルの「市民」の初音に於いて、この或はかの國家が同盟に於いて第四番目たらんことに努力したといひ、またドン・カルロススの文句の初音に、フランス公使が何物を貫徹しない感情で退いたといひ、或は有名なフリードリツヒ大王の説話の諷示にかゝる誹謗はより低くかけらるべく役立つといふ場合、その中に存する反語的用法の如き、それが目指してゐる表現の眞髓を直接に理解せしむることを明にすれば足る。

後世の研究家にして政治新聞或は議會の演説等、吾人の日常文學の個々の史料によつて苦手し、然かも吾人の如く詳細に吾人の文學及びその精神的雰囲気の知識を有せざる場合、無數の表現の直接な理解が非常にまた、半ば制限されねばならないことは明白である。今日の研究者が或昔日の時期の史料に對しても全然同様である。假令は中古にあつては、吾人の古典家から記憶、教會的文學、またローマ的文藝の記憶が、吾人に更に非常な程度で同じ役割を爲し、此等の文學を相當に熟知してゐなければ、中古的表現の特有の色彩を正當に判定し得ない。

私の論文「アウグスティヌスの神學から見た中古の政治觀念」(ドイツ史學雜誌、紀元一八九七年、N. F. 第一卷、第 101) "Politische Begriffe des Mittelalters im Lichte der Anschauungen Augustinus" に於て、私は種々の表現及び用語を示し、殊にグレゴール七世の議論に於ける *Justitia* なる詞の特別な意義を示した。——假令はその時代のある史料に、ハインリッヒと五世について、彼が彼の父ハインリッヒと四世に對して *sub specie religionis* を高めたといふ、——彼が戰鬥者に對して、法廷の名で現るゝが故に、先づ「宗教の口實の下に」と解釋される。之は全然正當であるが、然し同時代の者にはその詞にそれ以上の意味がある。反クリスト教徒に對しては常に特殊の用法が用ひられる故に、領主に對する最後の戦までは *sub specie religionis* は眞摯者として現にされる。かくてハインリッヒと五世に關するかゝる語法の用法は、之を知るものには惡魔的偽善者の明白な批難が讀解觀念として存在する。——他のかゝる例を擧げるものは、グリーベルの出版にかゝるトープラーのローマの言語學概説 *Fähigkeit, Grundriss der romanischen Philologie*, herausgegeben von Grotzsch 卷一第二十八頁及び再版第三五六頁である。

最後に、なほ他の見解からして言語の文學的特性を諒知することは、確的な理解に取つて必要である。何がある作家及び彼の時代の獨創的な思想製産物であるか、何か多少變形された引用句が、或は借用物であるかを區別する爲には、表現の精神的根源を知らねばならない。吾人に既に作者決定に關する所に、之が個人的文體の決定に取つて如何に重要なるかを述べた。之が解釋の上にも同様に重要である。中古の文學はその表現上非常に從屬的であるから、之

に關して最明白な例を供する。中古初期の多くの史家は大抵彼の時代の遠征、及び戰爭、個性、實に制度關係をば、ローマの史家、リビウス、ケイザル、デルスト等からの著しき、半ば詞のまゝの借用によつて記述して居り、また當時の歴史的敘事詩の詩人がビルギール、スタウニ等の調子によつて彼の薄弱な技術を助けてゐることは、十分知られてゐる通りである。また彼等は聖書の語法を使用して彼等の英雄の行爲及び特性を叙述して居る。かくてサクソニア戰記、皇帝ベレンガリー物語の如き詩はその三分の一は完全にかのローマの敘事詩作家の句及び句部である。かくてアインハルトはカロロ大帝の人物を骨を折つてスニートンの皇帝傳から採出した詞や、文句によつて書いてゐる。ケルン僧正ブルノーの傳記家ルオトゲル *Liutger* はブルテンテウスの義人ロママスの神化の表現を彼の英雄の記述に用ひ、またザルストのカチリナ人物評を以てブルノーの敵手を記述してゐる。秘書局に於ける古文書の草案は太極形式集及び皺形集を利用し、或は著作されたこの種類の文書を借用してゐる。かゝる興へられてゐる形式への適合によつて表現の直接性、個々の文句の意義及び前編史料性質のこの條に注意した如き、事實の内容的復舊が、非常に輕視され得ること、また之を考へて解釋が行はねばならないことは容易く見られる。さきに詞の意義變化について述べたことも、半ばこゝに屬する。假令中古のもの程に長く著しい程度にないにせよ、同様な方法で、吾人が作者の決定の所に述べた如き全く傳承的な容姿及び形式があり、總ての文學は從屬的な要素を有するものであるから、之と獨創的な表現とを區別することが言語的解釋の問題である。

この注目すべき例はスウィス史學報、紀元一八九五年、卷二〇、第一三頁のハ・プレスダウのスウィスのロルカントの最古の同題 *U. Troshan, Das in Ulesia Bimulus der Schweizer Urtakant* である。デューリッヒ市へのある密藏にウンテルツルデンの村の代表者がデューリッヒに入つた "salutem et super iniurias victoriam triumphalem" を望んでゐる。昔この文句からして

テルワルデン人とデニールツヒ人とが當時共通の教と争つてゐたものと結論された。——然し之はこの時代の書翰文から見ても、明かに單に諸侯と市との間に行はれてゐる挨拶の形式であつて、明白な實際の關係を目指してゐる意義がない文句であるからして、誤つた解釋である。

吾人は總て此等の問題に關して、研究者はその史料の作者が自己の讀者として考へた同時代の最教育あるものの如くに、その史料の言語及びその多様な少異を熟知してゐなければならぬといふことを總括し得る。

(C) 史料の性質からの解釋 言語及び文學の根本的知識に結合されてゐる如き史料の純粹な言語的な解釋は意義の完全な、また確實な理解には不十分である。總ての文章及び文句はそれが現してゐる言語的及び事實的關係に於て解釋されねばならない。吾人は物語及び叙述の種類及び形式が非常に變更されることについて、既に前篇史料性質のC及びAの場合に説明した。かくてかゝる變形を觀察することが解釋の重要な問題である。言語學的方法學者は之を解釋してゐるが、特にベックは之を「發生的解釋」といふ詞で、プラスは之を「術語的解釋」といふ詞で深く研究してゐる。吾人に取つては、文字的作物の本質の研究が自己目的ではなく、却つてその中に報告されてゐる事實を完全に理解する手段に過ぎないが、彼處に述べられてゐる論點は十分に肯すべきものである。吾人はかの論點並に吾人が第四篇、第四章、第一節に述べた所を指示して、單に吾人の目的の爲にそのものの利用を説明することに満足せねばならない。

個々として、また全體として意義の理解が如何なる方法で文學的作物の性質に基くかは、詩の創造作物と科學の純粹な作物との間の相違を考へ、表現によつて個々の文句或は全作物に特有な意義を附與し、或は陰數する諷刺的、反語的、譬喩的敘述——總て特有な方法に於て——を考へ、歴史文學自體の種々なる形式を考ふるならば、明白なこと

である。假令ばアリストファネスが彼の喜劇に於いてソクラテス及び彼の市民仲間の多數のものについて報告する所は、この藝術作物の性質に應じて、之が現實により、また實に現實と反することによつてその公衆を笑はしめる爲に必要とせる喜劇的典型を作つた天才的氣分の產物として見るべきで、而してかゝる期待された作用からして個々の、また全體の記述された人物を理解せねばならない。またプラトーンが彼のデアローグに彼、即ち作者の考へて論争の指導及び説明の役割を實行してゐる哲學者を要し、而してかゝる役割をばソクラテスに指定してゐるが、ソクラテスによつてデアローグに現されてゐる見解は實際のソクラテスの見解として理解するべきではなく、却つてかのデアローグの目的に應じて、プラトーンの見解として理解するべきである。ローマ後期の頌詞の或物にはありありと皇帝の徳性及び勝利が物語られ、また莊嚴化されてゐるが、年代記家が之に關して物語つてゐるものと解せざるを得ない。二人の大名の間の同盟條約に於いて締結者の親密な友誼と愛情とが物語られるが、吾人は之をかゝる條約に見られる普通の形式に應じて理解すべきである。外交的覺書の表面に現はれる文句は締結者の考を變更せず現す秘密命令の表示とは違つて解釋さるべく、公使が報告する公的説明は彼がその本國に送つた眞實な報告とは違つて解釋せねばならない。

また史料の構造及び排列の如き外的要件も明白に理解に影響し、また考慮を要するものである。假令ば紀元十一—十二世紀の教會政治的争議文書思想經過は、只教會的文學の多數を引用した種類の當時の製作物には大抵特有な議論の文句があること、また排列の糸が屢々この引用によつて貫かれて、全く整然と組織されてゐないことを觀察することによつてのみ理解するを得る。かゝる争議文書のこの種類の性質を無視しても、その中に排列されてない材料を見ることは出來得るものである。紀元十四—十五世紀の教會法的法律知識の冊子及び論争を取扱ふ場合、反對試験

"an *anfractu probare*"といふ特有な證明法を知らなければ、全然その思考過程を追究するを得ない。多くの統計的、また所謂統計的記述の排列組織の正當な知識に屢々その記述の全體の意義がかゝつて居り、また屢々非常な努力と炯眼の勞費によつてのみ、かの認識が得られるものである。

かくて史料の性質を全體に於て、また個々の部分に於いて正當に認識することは、種々な關係上いつも全然容易ではない。屢々全體の史料種類がこの點に於いて誤解され、また従つて不正當に解釋される。吾人は時々傳説の性質が種々に解釋されることを前篇史料性質の傳説の條に述べたが、之によつてこの問題は解釋の正當な、中庸な論點が得られるまでは、代り代り、而的に、譬喩的に、徹底的に、語原的に、有理的に、歴史的に解釋されてゐる。譬喩的及び他の陰微的敘述の限度及び邊限は屢々非常に判定され難く、また従つて殊に個々に於ては間違つて判定される。之に關する一例はマキシミリアン帝の "Thaenike" である。吾人が第四篇、第一章、第二節に史料の誤解について述べたものの多くはこゝに關係して居り、また反覆の要がない。

(D) 成立時代及び成立場所からの解釋 こゝには史料の表現の形式及び事實の意義の上に影響を有する時代及び場所に關する一般的及び特殊の關係を觀察するのであり、之は言語學者が「歴史的解釋」といふ詞の中に考へてゐるものである。吾人は既に第四篇、第四章、第三節内に之が史料の確實性に關する影響を説明したが、之は解釋に關しても十分相當に有效であり、従つてかの先きの説明を參考することによつてかゝる解釋に關する意義を明にするを要する。吾人は純粹な言語的解釋は史料が屬してゐる言語及び文學、實に時代及び周圍の全體の狀態の知識と如何に關係するかは、既にB節に説明した。

時代及び場所の史料の事實的理解に關する眞實な關係の知識は同じ程度に必要である。ドーブラーは「遠い過去の

時代の記念物の作者が生活した關係の多様な相違とに之を理解せんとする讀者の立つ關係の多様な相違とは、それが精神的構成の爲にその記念物が存立してゐた總ての世界のそれぞれの部分を必要とする。この史料の創作者がその最初の讀者と共に所有した同じ觀念に依つて知る事柄は無數であるが、今日の讀者は史料の内容を完全に、また多方面に正當に理解する爲にはかゝる觀察を初めて新に得なければならぬ」といふてゐるが、誠に最も適切な詞である。之は先づ作者が觸れる所、指示する所、作者が讀者にその深い知識を豫定しつゝ暗示する所の事實及び關係による。次に作者、彼の周圍及び彼の全時代が生活する總體の觀察圈・感情圈・知識圈に基く。兩者の一方は「一般事件」の知識に屬し、他方は作者の個性に屬するもので、かゝる事件の取扱については次節のE及び第四章に指示せねばならない。ことに之に屬する眞實な關係及び事實の知識は其の外に存する史料によつて傳へられるものであり、従つて特に史料相互の解釋の論點に入るべきで、之については第五節に取扱ふ。かくて吾人はこゝではこゝに述べてゐる解釋の問題は研究者、作者が公衆として考へた昔の讀者或は讀者圈の如くに出来るだけその時代、及び場所の關係を知らねばならぬことを總括するに満足せねばならない。

言語學者は特有な歴史文學に於てこの問題が他の問題ほどに觀察されないことに氣付いてゐる。それは歴史家は正しく知られない、或は不十分に知られてゐる事實を知らんと欲して、特に現代を考へず、却て後世に報告を齎らすことを目的とするが故に、事物の多くの知識を豫定してはならないからであるといふ。然し實際之は只半ば場合であつて、關係に於ては十分爲さるべきである。殊に之に關し歴史文學は他のもの、ことに美文學などに於て現れ、また従つて直接に認識される一般的及び個體的關係に於て、更に一層の「歴史解釋」を要することを忘れてはならない。

既に述べたことは、形象的記錄が技術史との關係によつて、その時代及び場所の精神的及び技術的能力から理解さ

れ、また假令は肖像などが表現能力、即ち個性表現の種々な程度に應じて非常に注意するべきである限り、半ば之にも適合する。

(E) 作者の個性からの解釋 吾人は第四篇、第四章、第二節に於て事實の確實性に關してその捕捉及び報告に及ぼす個性の根本的勢力を述べた。吾人が彼處に述べた要件は解釋に取つても標準的である。吾人はその知識によつて幾分吾人の知識及び感情を作者の精神に置き換へ得られる。こゝに總ての解釋の根柢が存する。實に總ての理解は或人間精神を他の側から捕捉することによるからである。而して作者の個性にその時代的及び場庭周圍が集中されるものであるから、吾人が今迄觀察した解釋の總ての糸はこゝに會合する。作者の個性を眞に理解することは、同時に彼が生活する全時代及び雰圍氣を理解することである。之については吾人が記錄の解釋の條に述べた共通性、即ち未知の特性を自己に再進する能力を要するが、この能力は想像力に屬するけれども、かの勝手に創造する詩的想像の種類ではなく、嚴格に與へられた事實と結合されて居り、その創造的動作が單に精神の表現として事實の統一的な、後感的な捕捉によつて成立するものである。之に吾人が歴史的人物の觀察に際して利用するものと全然同じ動作で、吾人は之に關して述ぶる、第三章に於いて、之にたゞさることとする。

先づ作者の個人的語法が觀察されねばならない。吾人は作者の決定の條に個人的文體と一般的文體との關係について述べ、而して多くの時代に於いて個人の特性が他のものよりも著しく明白で、有力であり、従つて多くの時代に於いて他のものよりも個々の作家の語法が一般語法から區別され、また實に個々の人物が同時代に於て或は多く、或は少く特殊的に形成されてゐることを主張した。總ての時代に於いて總ての作家の言語は、文學語が外國語で、學校的に同様に教へられた様な中古時代の如き個性化の少い時代ですら、一定の特質があり、即ち只ある詞及び詞の結合の

選擇或は一定の意義に於けるとのものの利用などは、確實な理解に重要である。故に吾人は取扱はねばならない作家の語法を出来るだけよく知り、またそれが問題になる時には個々の場合を研究しなければならない。古典的古代の範圍に於いては之が比較的完全な補助法、殊に特殊字典があつて、かゝる補助法を欠く他の範圍よりは容易であるが、吾人はこの場合も之に必要な研究の努力を避けてはならない。屢々全體の文句の意義また同時に重要な事實の正當な解釋はその個人的語法の確的な知識に關係する。

タキツスのゲルマニヤは之に關する無數の例を供する。今吾人は十分相談相手とすることの出来るアー・ゲルベル及びアー・グローム(A. Gerber und A. Groef)のタキツス字典がある。吾人はアインハルムのカロロ傳、第二十八章に於て *Invidiam famem suavitatis hominis negat tulle patiens* の文がアインハルムのカロロは不快ながら皇帝位を受けたといふ先に立つてゐる文章、かういふ關係にあるかといふ疑の存する場合、吾人は如何なる意識でアインハルムが普通 *homo* といふ分詞を用ふるかを統計的研究によつて確定し、そこから、彼が之を一般に非常な屢々用ひて居り、少くとも特有な副詞的意義で、多くは *invidiosum*, *kon-* *servare* といふ約束した意識で *"invidiosum"* の意義で用ひて居ることを見る。故に吾人は先に立つ文句に反對に立つてゐるものといふ、而してカロロの皇帝位に對する拒絶の理由に、サンチン人の *Invidia* (法三に於ける皇帝冠の授與) の支配に外ならなかつたといふ點を注意すべきである。—— *Gesta Henrici Augusti exilesis pontificum III 45iu* *S* ウェルツブルグ修正の *Diet* に關する重要な文句の理解は主として *Adm* が *proveniens* なる詞に理解されるものと關係してゐる。

勿論常に或文句の表現の意義が確實に決定し得られるとは限らない。作者の語法が時々同じ詞の使用に際して多くの意義の間を動搖し、或は疑問の表現が稀には統計的研究からして不十分な説明を得ることがある。またいつも表現が普通行はれてゐる意義を取るべきであるか、或は作者が之を特有な意義に使用したかが明瞭にならない。この場合に解釋の他の方法に於けることとして、勝手に之を決定する事を止めねばならない。この際作者の從來の確定されてゐ

る語法が解釋の事實的論點に應じて適當と思はれる意味に矛盾することが生じ得る。私の考ではこの場合一概に作家がこの場處に特にその表現を從來と違つた意味で使用してゐると取つてはならず、寧ろ從來確定されてゐる意義に引き寄せられねばならない。之が無數の場處に於て證明される場合は殊に然りである。

假令はタキッスのゲルマニヤ第十三章に種々に説明されてゐる文句がある。それは *Insignis nobilitas aut magna potentia mentis principis dignationem eorum adlocantibus assistant* といふ文句で *dignatio* の意義にある。タキッスはこの詞を只身他の意義 *virtute, kaisertum* に用ひてゐる。然し一般關係からの事實的解釋では能動的の意義 *weisheit* であると思はれるが、タキッスではこの意義に用ひてゐるのに適合しない。かゝる事情により、私の考では「最初の意義を固持し、之に應じてこの文句を解釋すべきものと決定せざるを得ない。ドイツ言語學雜誌、紀元一八八六年、第一八卷、第一二九頁のゲー・ケツネルのタキッスのゲルマニヤ第十三、十四章について Dr. Kuhn, Zu Tacitus Germania Kap. 13, 14 を参照せよ。digitaleum なる語方が定められては（ニル・シリール）のドイツ法律史家 Dr. Schubert, Lehrbuch der deutschen Rechtsgeschichte 5 Aufl. 1907 第三四頁、注二三を参照せよ）問題は明瞭である。またブー・タイプナーのローマ言語學概説の第三二七頁、第三五〇頁を参照せよ。

かゝる語法の除外例が、十分確實に統計的に確定するを得ず、また解釋が斷然從來の語法と違ふ説明を要求する場合、全く別な決定をせねばならない。かゝる場合如何なる方面から見ても必らず明白な優越點がなく、而して説明が疑しからざるを得ないことがある。

個人的文法の文學性質及びその時代の文法との關係は語法と同様である。作者の文學的個性が強ければ強いほど、その文體の特質を深く知ることによつて完全に正當に解釋される。この際最も多く之が文章結合及び移換の種類が關係する。

バックは彼の字典、第一〇九頁に、タキッスのアンナレ第一頁 *Deni res tranquillae; eadem magisterium vocabatur iniores post Actianum victoriam, eam sanes plerique inter bella civilia nudi: quodas quidam reliquis qui rem publicam viliasset* があるが之を採用したことは不正でなからうといふ非常に立派な例を與へてゐる。只タキッスが個々の文意及び文章部を分詞なくして互に接続し、またこゝでは反語的であるが、全體の關係の意義に應じて、そのものの補充を讀者に委せることを好むといふことが判れば、この四つの文章の關係が起るのである。第一の文章は内部に於ては平和であつたといふ次の文章の土臺となる。實に名稱の上では同じ官吏であつて、この共和制の外見は平和を保持するに十分であつた。然し之は青年がノクナウムの戦後漸く生れ、實に老人の多数は内亂の時代に生れて居り、従つて非常に少數のもののみが、自分の觀察からして古い制度を知つてゐたといふことが判然する。

最後に作者の個性的解釋が内部考證の場合よりも解釋の場合に取つて重要な要件である。之は非常に密接にその作物の性質と關係し、互に分離するを得ない。然しともかく史料の一般文學的性質と個々の史料に現る個人觀察とを區別することは出来る。吾人はこの意義に於いて先に己の史料の性質の條に特に取扱ふた。

吾人がこの節の初に述べた如く、個々の作者の觀察には全時代の觀察、その人の生活圈の觀察、特有の精神及び本質の觀察が結合される。個人的語法及び文體が一般的なものに相當する如くに、最後のものはかの一般的觀察に全然相當するものである。吾人はその取扱の一般的觀察については第四章に述べることとして、こゝには出来るだけそのものについて取扱ふのである。私が「出来るだけ」といふのは、個人的のものは彼の時代、彼の階級、職業、彼の國民の觀察と分れ得ざる程に織り込まれて居り、而して實にその組織的な取扱の關係上總て與へられた勢力の消化から特に創造的精神に成立し、また特に或作物に表現されるものを注目せねばならないからである。かゝる特殊な解釋の印象力は勿論種々なる時代に於て、また種々なる人間によつて異なることは、特有な言語法及び文體の印象力と同じ

く、また之に應じて史料の上に多く、或は少く現れるものである。發展しない原始的文化の時期は個性の少い差を示し、また高い文化の時期には個人の非常に違つた教育が最も近い時代と非常にかけはなれた分離を示すもので、主義の時期、文藝復興の時期、「啓蒙主義」の時期ロマンチック主義の時期の如くである。ある時代の作家にはその作物に特有な觀察を示す主観的、熱情的性格を有する。作家の觀察が印象的であればあるほど全體として、また個々として彼の作物の理解はその個性の知識と關係する。實に解釋は勿論印象的でない個性の詩的な影響も注意して回顧しなければならない。

オットー・フォン・フライシングが彼皇帝フリーデリヒ傳、紀元一五六年二月三十日條に皇帝は先きに發禁してゐる上イタリヤ諸市を滅したが、激烈な市街戦でローマ人を征服して下イタリヤの道祖を暫時延引したことにのみ *dominus princeps ad Transalpina* (即ちイタリヤはヒマツの方) *reliens, statim transire presensit, sua pace reddidit sic Italiam absentem subnixit* といふのは如何に解釋するべきか。只吾人がこの傳記はフリーデリヒがスタウフマン家及びウエルフニン家の長い混亂の後に神によつて選ばれた平和の君であり、神によつて任命され、また正義の劍を授けられた台座として、彼の平和育の職によつて必然イマリカスと考へるべき平和の破壊者及び反逆者を征服したのであるといふ觀察に支配されてゐるものと考へる場合のみ理解されるのである。然らざればこの文句は正しく矛盾してゐる。少くともフリーデリヒ傳の卷二の第三章の終に、オットーが戴冠日に當り同時に偶然僧正を任命したことをこの新に選舉されたものの全治世の導きとして現してゐる他の文句 *quia in una ecclesia unus deus ducum pars namque, quia seorsum non ac velis instrumenti institutione sacramentaliter unguntur et christi Domini rite deus, videt unumquemque* の文句は不明瞭である。これはオットーの理想では法王と平等の位置に立ち相援けて法王の如く神の使命に依つて平和の天國、神國を地上に齎すことに努力するのが王位及び皇帝位で、之がフリードリッヒによつて實現される事が望まれたことを知らなければ、この文句は不明瞭である。而してかゝる種類の個々の表示の如くに、全體の作物がかゝる特有な

教會政治的觀察からのみ正當に理解されるのであつて、之は作者の精神的個性を多方面に理解してゐる場合に初めて知り得べきものである。(オーストリア歴史研究會報告、紀元一八八五年、卷六、第一頁の論文オットー・フォン・フライシング及びその作物の性質 *Abhandlung der Charaktere Otos von Freising und seine Werke* 及び先に引いたアウグスチンの觀察にもとづく中古の政治觀念 *Politische Begriffe des Mittelalters im Lichte den Anschauungen Augustins* を参照せよ)——ハインリッヒ・フォン・トライチケのドイツ史を完全に理解する爲には、吾人はこの作物を支配してゐる觀察が國家の幸福は第一に政府の形式に基くとしてゐる自由主義者の共和的、世界的傾向に反し一政府の國家組織力及び行政力を注目する王國的民族的意識の強力な反動から生じてゐることを觀察しなければならぬ。——タキッスの作物は精神と國家の王國的形體に反對して共和的反動が貫いて居り、而して只この假定からしてこの人の現行狀態及び皇帝政治の全敘述に關する幾多の表示及び判定の組織にして嚴密なることが完全に理解されるべく、先きに引いた例の如き幾多の個々の文章の言語上の理解はこの假定に關係してゐるのである。

作家の文に小さい動機、傾向、趣味、關係及び知識、此等が個人的である限りは同様こゝに注目されねばならない。

假令は吾人は皇帝コンラッド二世の傳記からして、ウイボートが王の教父たりしこと、從つて彼は王をその戴冠の瞬間から皇帝とよんだほどに王及び皇帝といふ稱號を儀禮的に、また制度的に正當に利用したことが知られる。而して吾人は之に従つて他の記述家が時々目茶苦茶に使つてゐるこの稱號をば彼は十分精密に使つてゐると取るのである。——ヨルダネスは自身がゴート人であり而して彼の民族に對する得意の愛情に充されてゐるが、彼のゴートの歴史にはゴート人の民族的争亂については何等の趣味を示さないが、之は彼がアメール家の黨人として王位から退かれたこの家の子孫に同情して居り、また同時にカトリック信者として、また將領としてこの家によつて初められたローマ文化への順應を以てゴート族の救済と見る特殊の原因を言つて居たといふ事に依つて理解される。——オットー・フォン・フライシングは彼の年代記、卷七、第三四章に、またフリーデリッヒ傳、卷一の二九に吾人の一般の判定では全然現著に見る如くに情ないほどにばらばらに王國の事情を描いてゐるが、之はオットーの近々、周圍及び殊に彼の正領フライシングがウエルフニン家とスタウフニン家の争に全く特別に惱まされたのであるといふことで判明する。

全文學的態度、また従つて個々の作家の理解が個人的黨派關係によつて著しく影響を受ことくるは、例證を要せざるほどに非常に明白なことである。

(F) 吾人は *e* から *e* まで記錄の説明に關する種々なる補助法を説明した後、に於て、その利用の境界を指示する事が必要である。忘證と同じく忘釋 *Itymementum* がある。この詞は普通に用ひられないが、多少の偏見及び不十分な事實知識からして勝手に、非方法的に取扱はれた解釋であつて、當然間違つた解釋に到達すべきものである。吾人が *e* から *s* に述べた説明の總ての方法にも拘らず、不十分な知識によつて間違を生じ得ることは、吾人のかしの説明によつて十分明白である。實にかゝる間違つた觀念が偏見によつて引證されて、之によつて公平なる讀者には全然發見するを得ない事實を史料中に挿入する場合には、初めて主義的、方法的な犯罪となる。

かゝる偏見は先づ史料の有の儘の詞の中に發見される以上を知らんとし、従つて詞を無理強をし、また幾分行間を讀まんとする過大な知識慾によつて成立し得る。タキツスのゲルマニアの多數の文句の解釋は特に之に關する例を供する。カツバル的、また豫言者的説明の如く、文學的作物から材料に應じてその中に存するものと全然違つた性質のものを引出すのは、こゝには全然問題にならない。歴史的範圍に於ける幾多の説明的試みにもかゝる神秘的經驗の態度の存在を想起するのである。

ゲー・フオー・ブツワルドが彼の非常に價値ある著作に元十二世紀及び十三世紀の僧正及び諸侯文書 *G. von Brechtel, Die Abschieds- Künstlerkunden des 12 und 13 Jahrhunderts* (1882) に於いて *Brüder* 及び他の僧正文書に多少黨派に發達したある韻律の存在を證明するに満足せずして、その中に表現の深く *brüder* はとされた徴象を考へた。之は時々應與狀の純粹な文句が與合せる人心の示現であるといはれてゐるが如きもので、その文句は *Insperet omnem destinationem alioqui sive in villis / sive in*

agris / sive de silvis extrinsecis / quonunque tamloce eis / confacendi / iserum sustentationi / pro mea et coepiscopo- rum / meorum post me futurum / perpetuo relatione / demerit、*Brüder* によつて特に次の如くいふのである。 *salvatio* といふ詞の選擇は第一に *Reines* 第二に *Steigerung* 第三には *Eschatlichkeit* の爲に使用されてゐる。より普通の *salva* といふ詞にとつては珍しい表示である *salvatio* は動作を現す。故にこれは次の十語の意味せるものと考へる。エゲリン *Vredin* (この古文書の作者) は彼の所作の結果である状態 *salva* を考へるのではなく、却つて救世主の能動的な平與を考へてゐる。然し救世主の能動的な平與は全能説に矛盾するので、人間善行の必然の結果として考へ得られず、*salva* *superioris* の働きとして、單に神聖的な自由な自決として現される。然しこの學説は最有利なもので、従て至キリスト教中、總ての人心に最透徹してゐるものである。作家は文體上この溫和な方面を只最も輕い接觸によつて鳴らし、クリスト教的感情生活に心がとざされて居り、死んでゐる總ての人に完全な理解を確實ならしむることを必要とした。……デクトールの意志が最初に *Reines* の爲に救済を要すと決定した時に、この詞がかの溫和な教義的方面を彼の心に鳴らした。かゝる觀念聯想が勝利を無償する感情を彼に臥めた。その標言である「死、何處に汝の針ありや。地獄に、何處に汝の勝利ありや」といふ詞は實教地の境界にある異教者には容易に考へられた詞である。之は明かに詞を無理強ひし、或は行間を盜むものであり、提出されてゐる表示に與へられた事實によつて、またこの外の解釋的方法的な補助法では、全然發見されない作家の見解に於ける自由な自己想像である。

かゝる偏見が解釋上内容的に一定せる傾向を有する場合は非常に危險であり、實に科學的研究に取つての大危險である。明かに人間は自己が見るもの、聞くもの、主として五感によつて感受するものを、たゞ輕く捕捉するのでなくして、却つて想像によつて屢々間違つた、違つた五感的印象に和込むといふ特有な稟賦を持つてゐるのである。時々主觀的傾向を有する人は、自己の疑問に對してその欲する所を答へ、自己の考に適するもののみを理解し、出來得べくは自己の考を受入れしむる爲にその考を一度も二度も非常な努力で反覆することは、日常生活の經驗から知られる。又

研究家が一定の現象を注目するや、専門仲間が度々之を注意するものと考ふるが、其後度々全觀察が間違つたことの起ることは経験の歴史から明かである。かゝる人間本體の自然的傾向は心の好尚及び欲望が想像力によつて理性的事實的判定を急ぎ、或は觀察及び判定の一度取つた方向、最も近く得られた解釋を故意に確定せんと努力するに至らしめ、屢々解釋が方法的訓練によつて拘束されざる場合には、非常に困亂し、また間違はれる。かくてある史料に於て既に捕捉されてゐる考の意味ではその中に讀み、または聞くことの望まれず、また期待されないものを、それから讀み、また聞くことになり、彼の解釋は全然若くは幾分先に得られた見解に矛盾し、或はその變更を必要とする事實を包含することになる。

かゝる訓練されない解釋の著しい例はアー・フリードリッヒ・グフリーレルの作物、殊に法王クレゴリオ七世及びその時代にて *Fr. Güter, Papst Gregorius VII und seines Zeitalter* 1859 が供する所だ。その第七卷から次のことを紹介する。グフリーレルにはハインリッヒ四世王は無遠慮な利己的な專制君主で、彼の不誠實な援助者によつて天國を壓迫し、自己の利益の要求する場合に如何なる犯罪をも恐れず、また反對派が多少の汚行をなせる場合は常に彼の手を働かした人であるといふ意見である。この時代の記者も彼の復讐を恐れる所から自由に之を物語るを得ずして、彼等の意見は屢々只反論の形で或は、何か他の方法を秘かに現すことを敢てしたものである。この最後の場合はその時代及びその作家の性質が注目されず、而して其上にハインリッヒの事實上の專政が全然證明されない限りは、かの方法的解釋に對して非常な厄介である。然し吾人はグフリーレルがこの偏見に支配されていかにラムベルト・フォン・ヘルスフェルドの個々文句を解釋したかを試験する爲に之を概観する。紀元一〇七四年のケルン人の大僧正に對する蜂起を取扱ふ(マイツ大史料叢文集第二二一頁、ホルダー・ニツゲル出版のオクタブ版、紀元一八九四年刊、第一八六頁)グフリーレルの取つた考によれば、蜂起を生ぜしめたのはハインリッヒであるといふ。ラムベルトは之を斷言することゝ敢てしないが、彼が次の如く物語るところによつて十分明かに之を意味してゐる。 *inter haec conspicitur quoniam ipsam te-*

llem frutem innotentem demonem praesuror insuendi populo Galienum, lociatum mucrone terribiliter fulgurantem nec ulli quam sibi similem, cuique nulli quoniam classico cunctabes, nō se in pugnam sequentem, cunctetur in ipso impetu...repente ex oculis sequentium disparuit 之をグフリーレルは前書第三五四頁にかく解釋してゐる。蜂起者の頭首に置かれてゐる貴き外人がケルンに侵入し大僧正領アルツに最初の攻撃を試みた。彼の現在は隠され得ず、また拒まれ得なかつた。故にこの外人が朝廷と關係のあることを隠さんとした人々は今自分から巨人的現象を作り上げ、之に相當する風評の廣まるに委せた。ラムベルトはかゝる談を彼の年代記に採用した。然し彼は之を特有な方法で行ふた。即ち惡鬼が甲や、胸甲を着し、躍いてゐる劍を以て武裝して居り、全然騎士の如くである。更になほ詞をついて、彼は喇叭手を伴ふて居り、或は率ゐる一つの多分更に多數の喇叭手を伴ふてゐる。實に之は多分常にハインリッヒ四世に依つて決定された犯罪を完成する王の十二人の巨人的青年、或はバラチネンの一人であつたに相違ない。惡鬼は破壊の仕事が初つた後間もなく人間の目から消え、即ち隠れたことが規則通りである。實に大僧正の忠實な僧兵は出來るだけ之を捕虜とし、而して直ちにケルンに行はれた特有な惡魔の業について裁判上の證明を製作し得たが、かゝることは惡魔の側は非常に不手揃で、またハインリッヒ四世に取つては不愉快であつたに相違ない。ラムベルトが喇叭手を附したのは明かに深慮の上である。彼は彼の心の中を「惡鬼は自分と類似した何名をも見なかつた」といふ諷刺的な詞を渡らしてゐる。惡鬼を精密に見る機會を得た多くの人は次の様に言ひ現したと思ふ。「有形の惡魔が存在してゐる事を朝廷派が保證せざる場合、多分、之をバラチネの一人として考へざるを得なかつた。實は彼はカルリッヒ・フォン・ゴツテスハツス或は十二人の他のものと全然そっくりなものを見た」。あらゆる方法的解釋に對する殆んど總ての矛盾がこゝに總合されてゐる。官權に對し、殊に僧侶に對する蜂起は完全な證明から惡鬼の直接な仕業と考へられた、その時代、ことにその時代の僧侶的作家の一般觀察が忘れられてゐる。當時惡鬼の特性を示す全然普通の詞である *nec ulli quam sibi similem* といふ語法が誤解されてゐる。ラムベルト及び彼の作物の性質はラムベルトが隠してゐる反語から、また諷刺から離れて、常に無遠慮に彼の考へた所を言ひ現し、王に對し最も少い保留をも命じてゐないので、誤解されてゐるのだ。

これほど大膽でない例を供してゐるのは史學雜誌、紀元一八六一年、第五卷、第一一頁及びドイツ歴史研究、紀元一八六四年第四卷、第五八七頁にあるウエー・マウレンブレツヘル W. Maurenbrecher の紀元九五三年にリウドルフが父のオットー一世主に對する蜂起に關する説明である。マウレンブレツヘルは吾人の中古の皇帝のイタリヤ政策は密接なドイツ的民族關係を害したといふ意見から出發して、その時代の史料中にかの政策に對する民族的反對の痕跡を發見すべきことを期待し、而してかゝるものをリウドルフの激烈な蜂起に發見してゐる。この蜂起は勿論オットーのイタリヤ事業と關聯してゐるが、實際之は單に多くの個人的動機に歸すべきものである。マウレンブレツヘルは駁して彼の研究、第五八八頁に述べてゐる一般の見解によつて彼の遺つた説明をたてたが、當時の記者は僭僞的拘束によつて事件の政治的動機及び論點を評價し、或は復活することは出来なかつたのである。吾人のいふ所に誤なしとせば、かゝる見解は猶單純に英雄的であり、また個人的動機に導かれてゐるかの時代の性質の誤解に基くもので、個人的偏見に對する不満はリウドルフを戦に陥しむるに十分であつた。歴史人物は記者が一般に吾人に洩してゐる程に政治的主義を有つてゐないのであるから、偏見的な解釋を爲すことを欲しないならば、其の人物に多くのものを追加すべきでない。

偏見に留める解釋は十分屢々自己の範圍の採用に止らずして、勝手に考證の職分に干與するに至る。之が非考證的に他の讀方に對して或讀方を、自己の便宜の爲に他の證據に對して或證據を秀れてゐるとなし、更に本文考證上不都合な語彙、結合詞の變更を許し、また自己の偏見よりして史料の眞或は不眞を決定する。實にかゝる解釋の不當な干與を防止することは考證の問題であり、之については次の節に見る所である。

總てかゝる違法に對する方法的解釋の主要問題としては作者がその詞を以て何を表現せんと欲し、何を表現し得たかを確定せねばならない。かゝる問題は吾人が先にもからにすでに學んだ總ての補助法を以て答ふる様で試られねばならない。而してベツクが其字典の第二二二頁に確的にいふてゐる如くに、詞の中、作家が之を用ひた際に考へた以上のものを加へてはならない。